



成人病（生活習慣病）*News Letter*

第44回日本成人病(生活習慣病)学会 開催にあたって

第44回日本成人病（生活習慣病）学会会長
帝京大学医学部内科 主任教授 寺本 民生



来る、平成22年1月9日(土)、10日(日)の二日間にわたって、第44回日本成人病(生活習慣病)学会を、例年通り都市センターホテルにて開催させていただきます。

本学会のテーマは「生活習慣から高齢化社会を展望する」とさせていただきます。まれに見るスピードで高齢化社会を築いたわが国として、どのような生活習慣がいわゆる生活習慣病を予防し、長寿化に導いたのか、世界に発信する責務があると感じております。しかし、一方で、沖縄ショックにみられるように、寿命の短縮化という二方向性の動きがあることは見逃せません。そこで、本学会では、「百寿歳の生活習慣」という側面と、「小児の生活習慣対策」という側面から、この二方向性の問題をとらえることにより、健全な生活習慣のあるべき姿を描出したいと考えております。また、生活習慣の基本となる食事、運動というものをサイエンスという側面からもう一度確認しておきたいと考えております。

もちろん我が国の死因のトップは悪性腫瘍です。生活習慣で、その多くは予防ができるはずです。そして、高齢化社会を迎えた今、その治療法にも工夫が求められているのが現状です。このような点を踏まえたシンポジウムも用意させていただきました。

高齢化社会を支えたわが国の生活習慣をもう一度見直して、より健全な高齢者を創出することこそが本学会の使命であると感じております。

是非多くの会員の先生方、そして、その周囲の方にもお声をかけていただき多くの先生方にお集まりいただき、活発な議論の上、社会に対して健全な生活習慣の提言をしていければ、本学会の本意が達せられるものと期待しております。

先生方のご協力をよろしくお願いいたします。

第44回日本成人病(生活習慣病)学会の聴き所

— 学術講演主要プログラム —

第44回日本成人病（生活習慣病）学会は来年1月9日（土）、10日（日）都市センターホテルにて開催されます。今回はシンポジウムとランチョンセミナーの御案内をいたします。

シンポジウムは両日に1つずつ、計2つが予定されています。

9日には“高齢化社会における癌治療最前線(座長江口研二先生(帝京大学)、垣添忠生先生(国立がんセンター))”と題して、最先端の癌治療に焦点をあてたシンポジウムを企画しました。腹腔鏡手術を北野正剛先生(大分大学)、胸腔鏡手術を鈴木健司先生(順天堂大学)、胃早期癌治療(EMR)を矢作直久先生(虎の門病院)、分子標的治療を中川和彦先生(近畿大学)、新しい放射線治療を早川和重先生(北里大学)にお願いしています。

10日には“職域におけるメタボリックシンドローム対策と特定健診・保健指導”(座長：廣部一彦先生(みずほ大阪健康開発センター)、木下誠(帝京大学))を企画しました。

職域でのメタボリックシンドローム対策、特定健診対策について、多田

紀夫先生(慈恵医科大学)、廣部一彦先生(みずほフィナンシャルグループ)、中村正和先生(大阪府立健康科学センター)、土肥誠太郎先生(三井化学本社健康管理室)、矢内美雪さん(キャノン健康管理センター)に議論していただきます。このシンポジウムは、認定産業医生涯研修(専門:3単位)として認められる予定です。

ランチョンセミナーは両日ともに2会場で行います。9日は、“DPP-4阻害薬シタグリプチンの臨床効果と有用性：岩本安彦先生(東京女子医大)”と“日常診療の中でTG・HDLをどう考えよう治療するか?：横手幸太郎先生(千葉大学)”の2演題が、10日は“インクレチンと糖尿病治療：綿田裕孝先生(順天堂大学)”と“早期インスリン導入を容易にするBOT療法～実地医家でのよりよい血糖コントロールのために：小田原雅人先生(東京医科大学)”が予定されています。

これらの企画に多くの先生方にお集まりいただき活発な議論が重ねられれば、本学会の意義が達せられるものと期待しています。

第44回日本成人病（生活習慣病）学会事務局 木下 誠

第 44 回日本成人病（生活習慣病）学会開催のお知らせ

会 期：2010年1月9日（土）・10日（日）
 場 所：都市センターホテル
 〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-4-1
 TEL:03-3265-8211
 URL: <http://www.toshicenter.co.jp>
 会 長：寺本民生(帝京大学内科 主任教授)
 会場費：医師・研究者および医薬・器械業者の方 8,000 円
 コメディカル 4,000 円

第 44 回日本成人病(生活習慣病)学会 プログラム(概要)

特別講演

「日本の疫学から生活習慣を見直す」
 磯 博康 (大阪大学大学院)

会長講演

「食事と動脈硬化」 寺本 民生 (帝京大学)

シンポジウム I

高齢化社会における癌治療最前線
 「内視鏡治療 1 腹腔鏡手術」 北野 正剛 (大分大学)
 「内視鏡治療 2 胸腔鏡手術」 鈴木 健司 (順天堂大学)
 「消化管腫瘍に対する内視鏡治療」 矢作 直久 (虎の門病院)
 「Molecular Target Therapy for Erderly Cancer Patients」
 中川 和彦 (近畿大学)
 「新しい放射線治療」 早川 和重 (北里大学)

シンポジウム II 産業医生涯研修 (専門: 3 単位) 認定 (予定) 職域におけるメタボリックシンドローム対策と特定健診・保健指導

「メタボリックシンドロームにおける脂質異常症の治療」
 多田 紀夫 (東京慈恵会医科大学)
 「心血管疾患 (過労死) の一次予防としての、職域メタボリック
 シンドローム対策」
 廣部 一彦 (みずほフィナンシャルグループ)
 「メタボリックシンドローム対策、特定保健指導における禁煙
 サポート」
 中村 正和 (大阪府立健康科学センター)
 「職域における特定健診・保健指導の現状と今後の課題
 ー産業医の立場からー」
 土肥誠太郎 (三井化学株式会社)
 「職域における特定健診・保健指導の現状と今後の課題
 ー産業看護職の立場からー」
 矢内 美雪 (キャノン株式会社)

教育講演 I

「身体活動のサイエンス」 森谷 敏夫 (京都大学)

教育講演 II

「栄養のサイエンス: 栄養シグナルとしての脂肪酸」
 小川 佳宏 (東京医科歯科大学)

Meet the Expert I

「百寿者調査から見た健康長寿達成の秘訣ー炎症と脂肪組織の
 役割ー」 広瀬 信義 (慶應義塾大学)

Meet the Expert II

「小児の生活習慣病対策」 児玉 浩子 (帝京大学)

プレナリーレクチャー I

「乳がんの治療最前線」 戸井 雅和 (京都大学)

プレナリーレクチャー II

「生活習慣病予防対策と国民健康・栄養調査」
 吉池 信男 (青森県立保健大学)

ランチョンセミナー I

「DPP-4 阻害薬シタグリプチンの臨床効果と有用性」
 岩本 安彦 (東京女子医科大学)

ランチョンセミナー II

「日常診療の中で TG・HDL をどう考え どう治療するか？」
 横手幸太郎 (千葉大学)

ランチョンセミナー III

「イレクレチンと糖尿病治療」
 綿田 裕孝 (順天堂大学)

ランチョンセミナー IV

「早期インスリン導入を容易にする BOT 療法ー実地医家でのよ
 りよい血糖コントロールのために」
 小田原雅人 (東京医科大学)

※敬称略

市民公開講座のお知らせ

日時:2010年1月10日(日) 13:30~16:00(開場:12:00予定)

会場:都市センターホテル コスモスホール

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-4-1 TEL:03-3265-8211

「まもろう 大切な心臓と脳—すこやかな明日のために—」

共催：日本成人病（生活習慣病）学会、アステラス製薬株式会社、ファイザー株式会社

開会挨拶

日本成人病（生活習慣病）学会理事長 跡見 裕

■基調講演 「恐ろしい動脈硬化の素顔—どうして動脈硬化がおこるのか—」

千葉大学長 齋藤 康

■スペシャリストの助言

1 「心臓病から身をまもる」

神戸学院大学栄養学部栄養学科 教授 / 日本内科学会総合内科専門医、認定循環器専門医
藤岡 由夫

2 「脳卒中から身をまもる」

熊本市市民病院神経内科 部長 橋本洋一郎

■パネルディスカッション

コーディネーター

日本成人病（生活習慣病）学会理事長 跡見 裕

第44回日本成人病（生活習慣病）学会学術集会会長 寺本 民生

パネリスト

千葉大学長 齋藤 康

神戸学院大学栄養学部栄養学科 教授 / 日本内科学会総合内科専門医、認定循環器専門医
藤岡 由夫

熊本市市民病院神経内科 部長 橋本洋一郎

司会

フリーアナウンサー 堤 信子

閉会挨拶

第44回日本成人病（生活習慣病）学会学術集会会長 寺本 民生

※この公開講座は事前申込制（市民向け）

お問い合わせ先：株式会社協和企画 コンベンション事業局内「日本成人病（生活習慣病）学会市民公開講座」係
〒105-0004 東京都港区新橋 2-20 新橋駅前ビル 1号館 9階 FAX：03-3573-2062

Key word

オートファジー (Autophagy)

東京大学腫瘍外科
北山 丈二

Autophagy とは、文字どおり解釈すると、自分自身 (auto) を食べる (phagy) ことで、「自食作用」と和訳されている細胞生物学的現象である。細胞は、栄養的飢餓状態や低酸素状態に陥った際に、生き残るために、自身が作ったタンパク質や細胞内小器官を消化することによって生存に必要なエネルギーを産生する機構を有しており、この現象は酵母からヒトに到るまでの真核生物に広くみられるらしい。つまりは、タコが外界からストレスを受けると自分の足を食べてしまうという行動をとることと同じイメージで考えると解りやすい。

ただ、Autophagy とは、どうもそういう特別な環境でのみ起こる現象なのではなく、細胞内ではきわめて日常的に行われている作業のようである。すなわち、細胞はこのメカニズムを利用して余分なタンパク質を分解、リサイクルに用いたり、細胞内に侵入した病原体を排除したりすることによって、内部の恒常性維持、今風に言うと”quality control”を可能にしていることが解って来た。Autophagy の分子機構は、酵母において詳細な検討がなされているが、ヒトを含む高等動物ではあまり調べられておらず、その病理学的意義についてもまだ未知な部分が多

い。しかし、その機構そのものを考えてみると、がんや感染症、様々な変成疾患、自己免疫疾患などの病態と密接に関わっていることが容易に推測できる。今後、臨床医学のさまざまな領域で注目すべき重要な現象であるように思われる。

さて、人間は栄養が過剰になると、いわゆるメタボリック症候群と呼ばれる様々な成人病を発症する。また、バブル経済や政官癒着が行き過ぎると、今日、この国が対面している様々や社会的弊害を引き起こす。「過剰状態」がもたらすマイナス面を是正するためには、自己を「食べる」という強い”self control”が要求されると考えれば、Autophagy は一個の細胞に留まらず、我々個人や社会集団についても当てはまる普遍的現象であると言えるだろうか。環境がもたらす様々なストレスは、自身を戒める機会を生命に提供してくれる自然の営みであり、その事実を明確に認識する知恵を持つ個体ないし種が生き残っていく、、というのが、ダーウイン理論の持つ「思想」なのかもしれない。Autophagy は生物学のみならず、人文学的、社会学的にも大変興味深い事象のように思える。



経口補水液 (Oral Rehydration Solution)

筑波大学 救急集中治療部
河野 了

脱水は体内の水分量が正常以下になった状態の総称であり、血漿浸透圧により高張性、低張性、等張性に分類される。血清ナトリウム濃度 150mEq/l 以上をとまなう高張性脱水は、水の補給のない高温環境下での作業や尿崩症など水分の喪失が原因となる。これに対し、140mEq/l 以下の低ナトリウム血症となる低張性脱水は、水分以上にナトリウムなど電解質の喪失が主となる病態で、下痢、嘔吐に合併することが多い。通常、高張性脱水では口渴を覚えるが、等張性、低張性脱水では症状が不明瞭なこともあり、医療機関を受診した時点ですでに重症化している症例も少なくない。重症例では輸液による水電解質異常の補正が必須であるが、軽症で全身状態が比較的良く経口摂取が可能な場合には電解質を含んだ水分を経口で摂取させることでも治療が可能である。水分は小腸上皮でナトリウムイオンとブドウ糖とともに吸収されるため、水単独よりもブドウ糖濃度が 2~2.5%程度でブドウ糖とナトリウムのモル比が 1:1、

浸透圧は血液 (270mOsm/L) よりもやや低い 200-250mOsm/L の溶液の吸収効率が最も高いことが知られている。一般に市販されているスポーツドリンクはナトリウム濃度が低く、水分含有量の少ない乳幼児や老人の脱水に不用意に与えると低ナトリウム血症を悪化させる危険性がある。これに対し、電解質と糖質のバランスを適切な組成に調整した溶液を経口補水液と称するが、最近では特別用途食品（個別評価型病者用食品）として販売されるようになってきている（大塚製薬工場 OS-1）。経口補水液は投与が容易であるため、本邦では点滴が難しい乳幼児の脱水の補正の他、医療行為が制限されるマラソン大会の救護所などで用いられている。また、経口補水液の原料となる経口補水塩は砂糖と食塩で安価に作る事ができるため、WHO や UNICEF は消化管感染症が原因となる脱水症が多い発展途上で配布を行い、補水治療に関する啓発活動を進めている。

寄稿文

タバコ対策の変革—日本成人病学会への期待

管工業健康保険組合健康管理センター
高山 重光

政 治、経済、環境対策・・・世の中のあらゆる領域で改革が進んでいます。そして今、タバコ対策にも変革の期待が寄せられています。

タバコによる健康被害については言うまでもありませんが、世界的な禁煙化の中で、日本はいつの間にかタバコ対策後進国といわれるようになってしまいました。

そんな日本でも、神奈川県を受動喫煙防止条約、政権交代によるタバコ事業法の廃止や増税議論など、市民、政治家やマスコミの協力が着実に社会の変化を起し、WHO FCTC（タバコ規制枠組み条約）の遵守という外圧も迫っています。

ここで日本のタバコ対策が一步前進するために、医療従事者にも意識改革が求められています。

タバコ煙の影響は、あらゆる年代で全身にわたるため、建物内禁煙化がなされていない日本では、受動喫煙の深刻な健康障害が懸念されます。

すべての医療従事者は常にタバコの健康障害を忘れず、様々な活動の場面で積極的に発言する重要な役目を担っています。日本でも多くの学会が禁煙宣言を行い、禁煙関連の学会・医師歯科医師連盟が熱心な活動を続けてきましたが、さらなる学会レベルの活動が期待されています。成人病（生活習慣病）医学において、喫煙の影響を以前から重要なテーマとして取り組んで来られた日本成人病学会の存在意義は大きく、その役割もより重要なものになっていくことと思います。

科学が急速に進歩していく現代においては、日々接する環境、食物、ストレス等の人体への影響を踏まえ、大局的な視野に立って医療を考えることの重要性はさらに高まると思われます。伝統ある成人病学会のさらなる積極的活動そして今後のご発展を祈念しております。

健診、禁煙支援業務の中で感じていることについて述べさせていただきました。貴重な機会を与えて頂いた青沼広報委員長に、この場をお借りして深謝いたします。

主な関連学会のお知らせ(2010年1月～4月)

第72回大腸癌研究会：1月15日

世話人：白水 和雄（久留米大学）

会場：葎香園ホテル（久留米市）

連絡先：久留米大学外科学講座 TEL：0942-35-3311

第38回日本総合健診学会：1月22日～23日

大会長：久代登志男（日本大学総合健診センター）

会場：都市センターホテル（東京都）

連絡先：コングレ TEL：03-5216-5318

第40回日本心臓血管外科学会学術総会：2月15日～17日

大会長：大北 裕（神戸大学大学院医学研究科）

連絡先：神戸大学大学院医学研究科心臓血管外科

TEL：078-382-5942

第6回日本消化管学会総会・学術集会：2月18日～19日

大会長：飯田 三雄（九州大学大学院医学研究科）

会場：福岡国際会議場（福岡市）

連絡先：勁草書房 コミュニケーション事業部

TEL：03-5840-6339

第82回日本胃癌学会：3月3日～5日

大会長：梨本 篤（新潟県立がんセンター・新潟病院）

会場：朱鷺メッセ（新潟市）

連絡先：新潟県立がんセンター・新潟病院外科

TEL：025-266-5111

第74回日本循環器学会総会・学術集会：3月5日～7日

大会長：北 徹（神戸市立医療センター中央市民病院）

会場：国立京都国際会館（京都市）

連絡先：京都大学大学院医学研究科 循環器内科学

TEL：075-752-3448

第110回日本外科学会学術集会：4月8日～10日

会頭：中尾 昭公（名古屋大学大学院医学系研究科）

会場：名古屋国際会議場（名古屋市）

連絡先：名古屋大学大学院医学系研究科 消化器外科学

TEL：052-741-2111

第107回日本内科学会総会・講演会：4月9日～11日

会頭：小林 祥泰（島根大学）

会場：東京国際フォーラム（東京都）

連絡先：日本内科学会 TEL：03-3813-5991

第35回日本脳卒中学会：4月15日～17日

大会長：小川 彰（岩手医科大学）

会場：岩手県民会館（盛岡市）

連絡先：岩手医科大学 TEL：019-651-5111

第96回日本消化器病学会：4月22日～24日

会長：畠山 勝義（新潟大学大学院医歯学総合研究科）

会場：新潟県民会館（新潟市）

連絡先：新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器・一般外科分野

TEL：025-223-6161

 **編集後記** 

事務局からのお願い

勤務先変更・住所変更・所属、役職等変更事項のある方は、必ず事務局へメール・FAX・葉書でご連絡下さい。
(電話での変更受け付けは出来ませんのでご注意ください。)

入会のお勧め

本学会は成人病・生活習慣病を対象とした学術団体です。会員数は現在約1,200名で、医師以外にも保健、栄養、スポーツ、検診関係の方々が数多く参加し、それぞれの場で活躍しています。今後「指導医」など資格制度を設ける計画も進行中です。本会の趣旨に賛同して頂ける方の多数の入会をお願いします。

なお、申し込み用紙は事務局に直接連絡して取り寄せるか、ホームページの申し込み用紙をダウンロードしてお使いください。

また、ホームページの「入会のご案内」より直接お申し込みも出来ますのでご利用ください。

※ホームページから入会のお申し込みをされる場合、年会費のご入金を確認出来た時点で入会となります。(会員番号と手続き完了のお知らせメールを送信致します。)

ご入金の確認が出来ない場合は正式入会にはなりませんので、ご注意ください。

一般会員年会費：3,000円／評議員年会費：6,000円
入会金：なし

2009年も最終コーナーに差し掛かり、21世紀における最初の10年がいよいよ終わろうとしている。現代は長足の進歩をとげる時代であり、全てのことが非常に短時間で決定されることが必要で、即座の決断を要する時代であるが、会員諸兄のこの1年は如何であったであろうか。

この1年で、最も重要な医学的問題はブタインフルエンザのパンデミックであるが、メキシコで初めての発生が確認されてから世界的大流行となるまでに2ヶ月以内の速さで感染が広がった。報道によると現在14人に1人が罹患し、14万人の罹患者に1人の死亡が認められているようであり、特に小児と基礎疾患を有した老人に重症化例がかたよっている。この死亡率は通常の季節性インフルエンザに比して高率であるため、ワクチンの早期接種が推奨されている。但し、ワクチンの接種に関してはカナダで製造されたワクチン接種後のアレルギー反応が強すぎ、カナダ政府にはワクチン使用中止の申請がなされており、このワクチンが12月下旬から我が国に輸入される予定となっており、インフルエンザワクチンに対する行政的な施策に対しても、今後予断を許さない事態が予想される。

今後パンデミックとなりうるトリインフルエンザでは、死亡率がより高く、ひと時流行が始まると更に悲惨な結果を招くことが予想されるのであり、今回のブタインフルエンザの経験を踏まえて、我々医師側も近い将来新たにきたる可能性が高く、より致死率の高いトリインフルエンザパンデミックに対処する方法を考えていかなければならないのである。

いずれにしても、この1年が終わると21世紀の新たな10年が始まるわけであり、会員諸兄の来る年のご多幸とご健勝を祈念するばかりである。

(青沼 和隆)

成人病（生活習慣病）ニュースレター
Vol.8-No3 2009年12月1日発行

発行人：跡見 裕
委員会顧問：増田善昭・山口 巖
責任編集委員：青沼和隆（筑波大学）
編集委員：馬原孝彦（東京医科大学）
河野 了（筑波大学）
木下 誠（帝京大学）
北川泰久（東海大学八王子病院）
北山丈二（東京大学）
佐藤麻子（東京女子医科大学）
中川敬一（東京シーサイドクリニック）
横山 登（昭和大学豊洲病院）
吉田晴彦（東京大学）

印刷所：株式会社 文 栄 社

本誌広告申し込み先：日本成人病（生活習慣病）学会事務局
(株) 文栄社 までお問合せください。

お問い合わせ・資料のご請求

日本成人病（生活習慣病）学会

事務局：〒113-0033 東京都文京区本郷3-40-3
(編集部) 株式会社 文栄社 内
TEL：03-3814-8541 FAX：03-3816-0415
E-mail：jimukyoku@j-seijinbyou.gr.jp
URL：http://www.j-seijinbyou.gr.jp